

はしがき

われわれの世界は音で満ち溢れている。音のない世界を誰も体験したことがない。音は大気の振動であり、大気のない真空の世界に行かない限り、音のない世界は体験できない。だが、われわれは真空の世界で生きることにはできない。別の言い方をすれば、真空の世界に耳を晒すことができないのだ。

最近のオーディオ機器の中でも、音を聞くイヤホンやヘッドホンの進化は目を見張るものがある。特に、ノイズキャンセリング機能は、外部の騒音を打ち消し、ヘッドホンからの音だけを聴くことができる。完全に、自分と音だけの世界が生み出せる。それは、音のない世界とは真逆で、音しか存在しない世界とも言える。

今から約四六億年前に地球が誕生した後、最初の音はどんな音だったのだろうかと思像することがある。約四六億年前の地球誕生と同時に、メタンやアンモニアなどでできた原始大気も生まれた。大気が音を伝えるのなら、この原始大気に覆われた地球にも、音はあったのではないか。イメージの世界では、誕生直後の大地は常に揺れ動き、あちこちで火山が噴火し、火口からは溶岩が流れている。そして、これらの現象にはガタガタ、ゴーゴー、ドロドロなど、さまざまな音も付随してイメージできる。しかし、実際にはその音を誰も聴いたことはないのだ。

クリストファー・ロイド『137億年の物語』には、宇宙が始まってから現在までの地球の歴史が、時代と出来事によって語られている。それによれば、酸性雨によって岩の浸食と風化が進んだ地表に最初に登場した植物は、水辺に生えた「海藻やコケに似たどろどろ」のものであった(ロイド二〇二二・四七)。これらが、やがて背の高い優美な木となり、水辺から内陸へと進出していくためには、数千万年という長い年月が必要であった。そして、それがなされた石炭紀(三億五九〇〇万年前)になると、幹と枝をもつ「ヒカゲノカズラ類」が登場した。そして、そのこ

る地表で聴こえた音についてロイドは、「この時代に、聞こえてくる音といえば、風の音か、木の空洞を引っかくような音、枝の間に響く羽音くらいのもので、どこも気味が悪いほど静かだったことだろう」と記している（ロイド二〇二二・四九）。しかし、まだわれわれが日常的に聴く森の音は生まれていない。なぜなら、「ヒカゲノカズラ」は葉を持たなかったからだ。枝の先に葉というソーラーシステムを持ち、光合成を行ってエネルギーを得る「真葉植物」が登場したことによって、ようやく風が葉を揺らす馴染み深い音が加わるのだ。しかし、その音をわれわれの祖先が聴くのは、まだまだ先の話である。

人間の祖先が耳の前身にあたる機能をもったのは、まだ海の中で暮らしていた魚類の仲間であったとき、耳小骨を一つ獲得し、両生類、爬虫類と進化するにしがたって耳に必要な骨を少しずつ獲得していった。そして、その骨を通じて、音を聴き始めたのだ。その時の音はどんな音だったのだろうか。想像するだけでも、ワクワクしてしまふ。その音は、自身にとって危険か安全かを判断する重要な情報だったのだろうか。音も無く忍び寄る捕食者をいち早く察知するには、近づいてくるかすかな音を聴き取らなければならない。現在のように、音を楽しみ、音で表現する世界は遙か先の出来事だ。

スタンリー・キューブリック (Stanley Kubrick) 監督が制作した『二〇〇一年宇宙の旅 (原題: 2001: A Space Odyssey)』では、冒頭に類人猿たちが洞窟で集団生活をしているシーンが登場する。もちろん想像の世界だが、類人猿たちはうなり声を上げ、排泄し、周りの音に注意を払っているように描かれている。聴こえてくる音は虫の音と彼らが立てる物音、そしてBGMだけだ。彼らが発するうなり声は動物の鳴き声のような音で、もちろん会話などは行っていない。虫の音以外の音がないのは、なんらかの意図があつてのことであろう。そして、ある夜に彼らが暮らす洞窟の前に、漆黒のモノリスが現れ、類人猿たちに「知恵」を授ける。知恵によって彼らは動物の骨を握り、振り回し、最終的には殺戮の道具として使うことを覚える。やがて、道具は武器となり、獲物を捕獲し、敵を殺し、空高く放り投げられた骨の姿は、宇宙船へと変わっていく。

この映画の中に登場するコンピュータ「HAL九〇〇〇」は、乗組員たちと声で会話をする。船内の至る所に設

置された赤いモニターカメラで乗組員の姿を捉えつつ、声のコミュニケーションを行う。映画の中盤で、暴走した「HAL9000」の電子回路をボーマン船長が抜くにしたがって、「HAL9000」の知能は低下し、やがて初期状態に戻る。自分の名前を語り、歌が歌えることを伝える。そして、「デイジー」を歌いながら完全に停止する。「HAL9000」に声を聴かれることを恐れた二人の乗組員は、船外活動用のポッドの中で通信を切って話し合いをするが、「HAL9000」はモニターカメラでポッドの窓越しに見える船員たちの唇の動きを読み、自分を機能停止しようとしていることを知る。声のコミュニケーションは声があれば成立しないのではなく、声に代わる情報によっても代替されるのだ。

俳優リチャード・ドレイファス (Richard Dreyfuss) 主演の映画『陽のあたる教室 (原題: *Mr. Holland's Opus*)』では、聾者の息子たちに音楽を楽しんでもらうイベントが開かれ、色とりどりの光の点滅と空気の振動で音楽を楽しむ工夫がなされていた。イベントの締め括りにドレイファス演じる音楽教師ホランドが、コミュニケーションがうまくとれない息子に向かって、直近に射殺されてしまったジョン・レノンの曲「ビューティフル・ボーイ」を手話と共に歌う。そして、帰宅すると息子が大きなスピーカーに座りながら大音量でビートルズのレコードを再生していた。ビートルズの曲を、座ったスピーカーの振動でお尻から「聴いていた」のだ。

手話には、声がない。手を打ち付ける音はするが、手指を使った無音の「声」が互いの意思を伝え合う。実際には、手話はそれだけではない。全身の動きや顔の表情なども使った、ダイナミックな言語であり、コミュニケーション術なのだ。だが、手話と声の、直接のコミュニケーションはできない。手話同士、声同士のコミュニケーションは可能なのに、手話と声の「会話」はできない。先の、聾者が音楽を楽しむように、手話と声のコミュニケーションは本当にできないのだろうか。聾者は、唇の動きを読むことができるという。では、われわれは聾者の何を読み取ればよいのだろうか。彼らとのコミュニケーションを遠ざけているのは、声のコミュニケーションしかない、われわれの方ではないのか。

声は、出した瞬間に消える宿命にある。声は儂く、時に受け手に届かないこともある。しかし、われわれは声を

出すことが可能ならば出し続け、その声を拾い続けなければならない。なぜならば、声のコミュニケーションが最も原初的で、基本的な方法だからである。声は、さまざまな情報を伝える。うれしい、悲しい、怒り、諦め、愛、憎しみ。人の命を救うことはもちろんだが、人を恐怖に陥れ、人の命を奪うことさえできる。声は、肺からの空気が喉頭にある声帯を振動させ、口と鼻から外部へと出る際に、舌と唇の動きによって生み出されるさまざまな音の変化によって存在する。言語学者のフェルディナン・ド・ソシュール (Ferdinand de Saussure) は、人間の言語には口から発せられる音の変化「ラング」と、その音に社会的な意味付けと規則を加えた「パロール」があり、それに従った「シニフィアン (意味しているもの)、シニフィエ (意味されているもの)」の組み合わせによって人間の言語構造は作られていると主張した。たとえば、「海 (Umi)」は「自然に、一面に水 (普通は塩水) をたたえている、地球上の部分」であるが、英語の「Sea」でも同じ意味となる。つまり、「自然に、一面に水 (普通は塩水) をたたえている、地球上の部分」は、UmiでもSeaでもAでもよく、両者の関係は言語が属する社会によって取り決められているのである。だからこそ他言語同士の翻訳が可能なのであり、人間同士の意思や愛情を伝え合う「会話」が実現できるのである。

現在では、機械翻訳機能も精度が向上し、スマホのアプリでも簡単な意思疎通は可能となっている。Sci-Fi (Science Fiction) の世界では、地球人のみならず宇宙人との会話も自動翻訳されている。もちろん、翻訳されなければ物語として進まないのが都合良くテクノロジーが作られているが、二〇一六年公開のドゥニ・ヴィルヌーヴ監督の映画『メッセージ (原題: Arrival)』では、言語学者のルイズ・バンクスが、飛来した宇宙船乗組員 (異星人) たちの言語構造を解明し、人類対異星人の戦争を回避するという物語だ。一九七七年に公開されたステイブン・スピルバーグ監督の映画『未知との遭遇 (原題: Close Encounters of the Third Kind)』では、異星人とのコミュニケーションに音と光が使われている。音と光のハーモニーは『陽のあたる教室』で行われた聴覚障がい者が音楽を楽しむシーンと重なり、言葉だけがコミュニケーションの手段ではないことが分かる。

一方、視覚障がい者にとっては、言葉や音は重要なコミュニケーション手段となる。信号機の音は信号が青に

なっている方向を表し、階段や改札口、入口を表す音として一定間隔でピンポンと鳴っている。最近では、点字ブロックに音声情報が埋め込まれ、白杖（けしよ）が情報を読み取ってスマートフォンから音声で伝えてくれる実験も行われている。点字ブロックは白杖や足を通じて情報を伝えてくれるが、工事中であったり自転車などの障害物が置かれていて、情報を読み取ることが困難な場合もある。音声での案内が点字ブロックだけでなく、道路の主要な部分から受け取ればより安全で安心な移動が可能となるだろう。

歴史的にみたとき、視覚障がい者たちの生活は現在とは比べものにならないほど困難であったが、言葉と音楽を伝える演者として社会のなかに存在していた。本書でも触れる「瞽女（こぜ）」は女性の視覚障がい者だけで共同生活し、秋から春先にかけての農閑期になると、徒歩で農村地帯の村々を巡って三味線と歌を披露する旅芸人であった。彼女らへの研究関心は主に芸能や福祉の観点であったが、音声という視点でみると、身体から発する歌を身体そのものが移動することで伝えていく一種の音声メディアであり、歌だけでなく旅の途中で見聞きした情報も伝える情報伝達メディアでもあったのだ。

本書を執筆している二〇二三年秋は、新型コロナウイルス感染が季節性インフルエンザと同じ5類に移行し、人々の生活が回復しつつある時期である。二〇二〇年一月から始まった新型コロナウイルス感染拡大は、人々の生活を大きく変えた。外出は制限され、テレワークや在宅勤務、オンライン授業などが突然始まり、直接人と会うことが難しくなった。同時に、「会話」が消え、閉店を余儀なくされた店からの音もなくなり、社会からさまざまな音と声が失われてしまった。視覚障がいを持つ人たちにとって、街の音は「耳印」として日常生活に欠かせない役割を持っていた。「耳印」とは、視覚的な「目印」と同様に、目的地に辿り着くための道順や方向を示す「音の地図」だ。NHKのWEB特集「静寂の街 消えた「耳印」」は、コロナ下で消えてしまった街の「耳印」と視覚障がい者の生活を取材した記事だ。閉店や休業などが相次いだことで、あったはずの街の「耳印」が消え、方向が分からなくなってしまう視覚障がい者の問題である。

何気なく観たり聴いたりしている風景や音が、新型コロナウイルス感染拡大によって消えてしまった。毎日の生活のなか

に存在していたものが突然消えてしまうと、大きな違和感を覚える。たとえば、あつたはずの建物が消え、更地になつたしまったときに、そこに何があつたのかを思い出せないもどかさのようなものだ。同様に、それまで騒音だと思っていた音が実は賑わいを作り、雑談だと思っていた会話が必要なコミュニケーションだということが新型コロナ感染拡大によって再認識された。音や声はわれわれの生活を彩り、包み込み、構成していたのだ。そのことに、新型コロナ感染拡大は、大きな犠牲を伴うと同時に気づかせてくれたのだ。

そして、本書ではその音と声とメディアの関係を、改めて問い直してみたい。それは、一般的な技術やメディアの時間を遡る作業ではなく、これまで顧みられることのなかつた音と声とメディアの関係や社会における存在を改めて問い直す作業でもある。そこには、人間はもちろん、地域や生活、メディアをめぐる欲望、悲しみや怒りといったきわめて日常的な出来事が関わっており、それを解き明かすことでわれわれがなぜ音と声というメディアを必要としているのかが見えてくるからである。

参考文献

- NHKのWEB特集「静寂の街 消えた『耳印』」(<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210212/k10012862391000.html>) (二〇二三年八月一五日最終閲覧)
- Lloyd, Christopher. *What on Earth Happened?: The Complete Story of the Planet, Life, and People from the Big Bang to the Present Day*. London: Bloomsbury Publishing, 2008. (＝野中香方子訳『137億年の物語——宇宙が始まってから今日までの全歴史』文藝春秋、二〇二二年)
- Herak, Stephen Robert. "Mr. Holland's Opus", 1995. [映画]
- Kubrick, Stanley. "2001: A Space Odyssey", 1968. [映画]
- Spielberg, Steven. "Close Encounters of the Third Kind", 1977. [映画]
- Villeneuve, Denis. "Arrival", 2016. [映画]